

古墳時代と中世の祈りが交差する

さんぶくじ いせき 三福寺遺跡

1. 三福寺遺跡の概要

入西地域につさい こやま小山に広がる三福寺遺跡は、弥生時代後半の集落をはじめとして、様々な時代・性格の遺構が見つかる複合遺跡ふくごうです。また、遺跡のほぼ全体が、坂戸市内でも最も古い古墳群のひとつである三福寺古墳群と重なっています。

遺跡内での宅地や墓地の造成に伴い、これまでに2回の発掘調査が行われています。今回の展示では、過去の発掘調査から見えてきた、「古墳時代の祈り」と「中世の祈り」が交差する様子についてご紹介します。

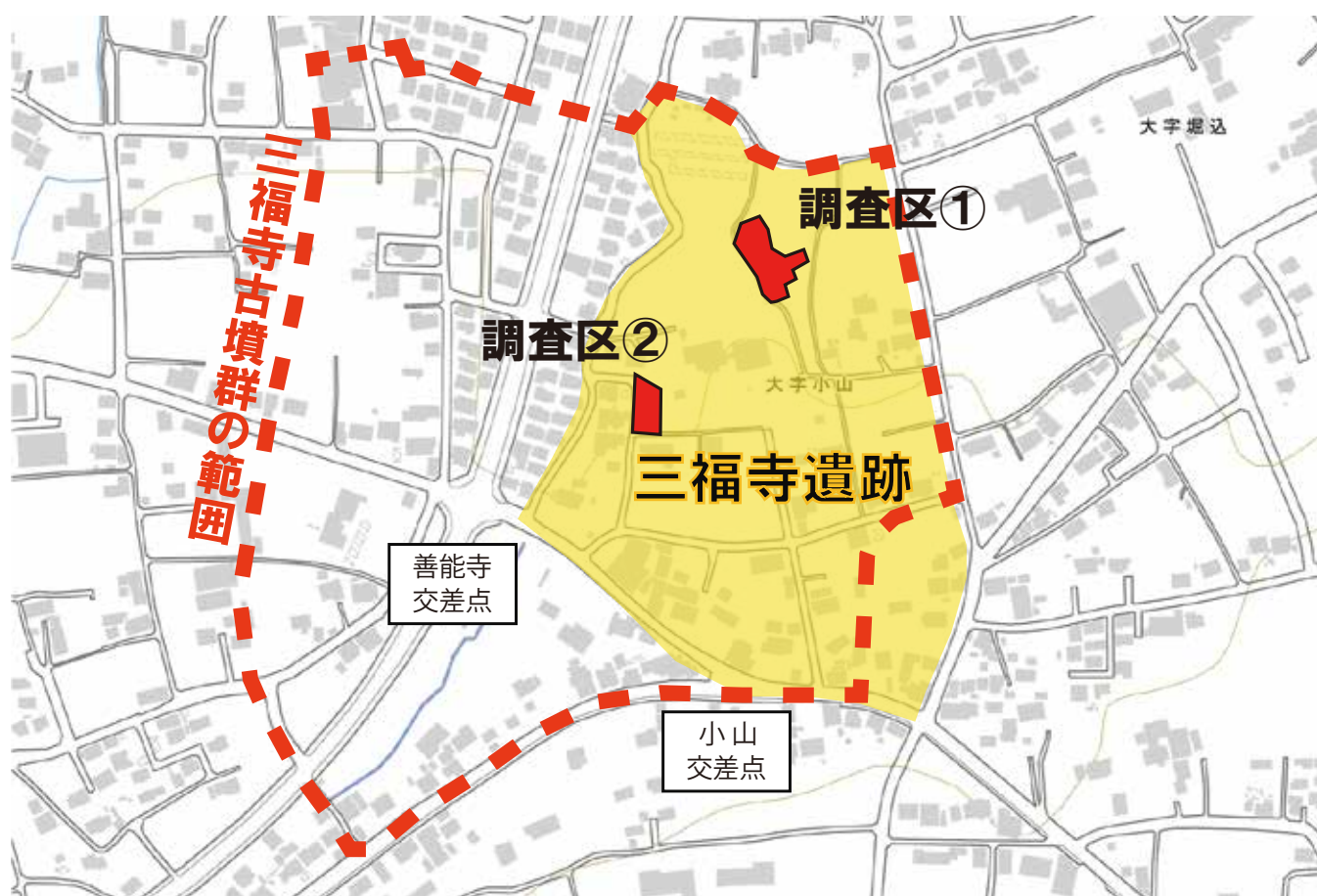


図) 三福寺遺跡および三福寺古墳群の範囲

★公開型GIS「e-マップさかど」で坂戸市の遺跡範囲を
ご覧いただけます！（右QRコードよりアクセス可）



2. 古墳時代の祈り

昭和末期～平成初期に行われた調査では4基（6～9号墳）、平成16年に
行われた調査では2基（10・11号墳）の古墳が発見されています。

いずれも円墳で、周溝からは多くの円筒埴輪しゅうこう えんとうはにわが出土しています。埴輪は古墳
を飾り立てる重要なアイテムであるとともに、古墳が神聖な「マツリの間」で
あることをアピールする役割もあったと考えられています。

また、7号墳からは主体部（亡くなった人を納める埋葬施設）として使われ
た白色粘土はくしよくねんどのほか、特殊な土器である「甗」はそうが出土しています。

「甗」はそうとは、液体を入れるための器です。胴の部分に空いた穴に管くだを差し込み、
注ぎ口にして使っていたようです。古墳から出土することが多く、亡き人を送
る「葬送儀礼」に使われたと考えられます。

通常、須恵器すえき かま（窯で焼いた灰色の器）として作られることが多いのですが、
この甗はそう はじきは土師器（素焼きの赤茶色の器）で、少し珍しい事例です。

3. 中世の祈り

昭和末期～平成初期の調査で発見された円墳（6号墳）の周辺からは、中世
の人々が古墳を「塚」つかに見立て、祈りの場としていた痕跡が見られました。

約120点が出土した「板碑」いたびは、故人こじんの供養や、自分自身の来世での成仏じょうぶつを
願う「逆修」ぎやくしゆのために造立ぞうりゆうされる石塔の一種です。形や刻まれた年代から、室
町時代～戦国時代の人々が造立したものとみられます。

このほか、特に珍しいものとして「瓦塔」がとうが見つかっています。寺院の塔を
ミニチュアにした「瓦塔」は、古代にはよくみられましたが、中世の例は全国
でも数えるほどしかなく、貴重な事例です。

古墳が後世の人々によって信仰空間として再利用される例は、実は珍しいも
のではありません。「祈りの場」であった古墳は、後の世までも神聖な場とし
て意識され続けていたのかもしれません。